

「入れないかもしれないってことですか。じゃ、急いで買ってきますね」

「それじゃあ、またね」

狭い世界だ、他にも誰かに出くわすかな、と思ったが、果たして業界に残っている知人はどれぐらいいるだろう。片手の指で足りてしまいそうな気がする。

それにしても、変な顔をされた。

トリコさんが私のことを気にしてる、つて言いたかつたのかな？

そういえば前回あつた時、「正月に幼なじみの夢を見た」と言ったら、突然泣かれたっけ。

「ねえ、どうしたの。泣くような話じゃないよ？」

「でもさ、好きだつたんでしょう、ねえ。今でも夢に見るくらい」

「別れた頃の顔しか思い出せないんだよ。二十年もたつてるんだから、もうヨリは戻らないよ」

——つて、まさかね。

あれは同情されただけだ。

トリコさんは面喰いだ。私が幼なじみを忘れてないことも知ってる。一番手に甘んじるようなタイプじゃない。

まあ、嫌われてはいないと思うけど——

* * *

「浴衣なんて着るの、久しぶり。うまく着られてるかな？」

夜、仕事を終えたトリコさんと合流し、同じ和室に寝ることになった。トリコさんも浴衣姿で、

「佐倉さん、いつつもジーンズだもんね」

「力仕事が多いから、職場でもデニムパンツが許されてたりするんだけど、ほぼユニクロで、最近はジーンズメイトですらないから、ちゃんとしたデニムの愛好家とは言えないかな。子どもの頃からはいてるのにね」

「主義でないなら、楽だから？」

「んー、幼なじみがジーンズが好きで、その影響で……膝に生まれつきの痣があつたんだけど、他人にいろいろ訊かれるのが厭だつたみたいで。彼女はまた中学生ぐらいの頃からちゃんと専門店で購入つてて、それを見て、いいなあ、私も着たいなあと思つてただけど、最初、親が許可してくれなくて」

「あー、それぐらいの年頃だと、服装の自由があんまりないよね。で、どうやって着るのに成功したの」

「強行突破」

「え？」

「彼女の家に遊びにいった時に、《私もはいてみたい》つて言つたら、何本か出してくれてね。試着して、一本履いたまま帰つたの。親がびっくりして、それからジーンズが堂々と買えるようになったつていうか……人のを借りてまで履きたいなんてみつともない、それぐらいなら、つていう展開」

正直、彼女のジーンズに足を通しながら、ドキドキしていたわけだけれど、トリコさんは、《わあ、いやらしい》などと茶化したりせず、

「いいんじゃない、強行突破」

さりりと言つて笑つた。

「佐倉さん、わりとお育ちイイ感じたからさ、親に反抗するの、大変だつたんじゃないの」特に反抗はしてなかつたけど……学生の頃、外泊禁止だつただけど、学祭の打ち上げの時に、あらかじめ遅くなるつて言つておいて、《もう終電がないから朝までどこかの店で時間つぶして帰るわ》つて強行突破したことはある」

「言い訳」

「いや別に、嘘はついてないし……まあ、ずっと音楽やつてたから、お酒を出す店には高校の頃から行つてたし。そういう意味では不良だつたかな」

「未成年の犯罪自慢？」

「飲んでるとは言つてないし」

「煙草もやんないよね」

「二十代の頃、試してみたことはあつたけど」

「幼なじみの影響？」

「うん、まあ」

ふと、トリコさんは視線をそらして、

「……そろそろ寝ようか。佐倉さんが明日、映画観ながら寝ちやうとあれだし」

「今日は寝てないですよ」

「佐倉さんは寝る時、真つ暗にしちやう派？ それとも、明かりがついてないと眠れない派？」

「若い頃は、小さい明かりがついてないと眠れない派だつたんですけどね。今は暗くしな

いと眠れないです」

「幼なじみが明かり派だつたつてことね」

「やけにからみますね、トリコさん」

「急に他人行儀な言葉遣いするのは、警戒してるからだよね」

「今さらトリコさんを、警戒するもなにも」

「じゃあ訊くけど、強行突破しちやつていいの？」

私は首をかしげた。

「別に、強行しなくても簡単に突破できちやいますよ、私なんか」

「そういうことじゃなくてさ」

「いや、私の方はかまわれないけど、トリコさんはかまわれない？」

「佐倉さんがかまわれないなら、私が何をかまうの」

「だつて私、トリコさんのタイプじゃないでしょうに」

「私だつて佐倉さんのタイプじゃないでしょう」

「いや、そんなことはない……」

「じゃあOK？」

「ええ、まあ」

トリコさんは照明に手を伸ばした。ちよつとはにかんだように笑つて、

「私も明かりがついてた方がいい派だけど、佐倉さんにあわせる。消すよ」

ふつと暗くなつてから後のことは、それぞれ映画の中のことのように——。

「ワイルド・ナイツは今回の目玉だから、早めにチケットを買つていた方がいいよ」
「うかなど」

「せっかく来たのでいろいろ観たいと思つてますけど、ダイキンスの映画は押さえてお

「さあねえ、よく知らないんだけど。佐倉さんは何を観に来たの？」
「うね」

「新しい彼女つてことですか？ トリコさんの好みなら、きつと若くて綺麗な娘さんでし

「へえ。彼女、今回、ずいぶんはりきつてるんだよね。なんか、好きな人が来るとかつ

「トリコさんに呼ばれてきたんです」
「お久しぶり。東北映画祭へようこそ。一人で来たの？」

これも昔の知人で、映像系のライターだつた。
「ちとせさん？」

「佐倉さん？」
トリコさんと別れ、キョロキョロしながらロビーに入ると、後ろから声がかつた。

「はい」
まあ、後で部屋を案内するよ。また後に

「一応、めばしいのは観てるんだよね。莫方だから、あんまり観客席にはいられないんだ」
「トリコさんはどれを観るんです？」

見逃した場面を巻き戻すことはできない。
ヤルが入つて休憩できる。オンラインなら適当なところでとめられる。だが、映画館では

しまつたりするので、自分から映画館に行くことは、本当にまれだ。テレビならコピーシ

美を言うつと、そもそも映画を観る習慣がない。二時間も集中力がもたず、ウトウトして

「つか、ま、気楽に観てつてよ」
「オンライン・ウーマン、よく知らないし、ポリアモリー物に慣れてないし」

「それは楽しみ」
「オンライン・ウーマンの方は楽しみじゃないの？」

「そう」
「あ、あのダイキンスの恋人の話？」

「アストン教授の秘密」とか《ワイルド・ナイツ・ウイズ・エミリー》とかも、上映あり」
「そりゃよかつた。映画祭、楽しんでつてね。今回は豪華だね、《オンライン・ウーマンと

「新幹線で旅行できるぐらいには」
「佐倉さん、久しぶり。元氣？」

今回もいい笑顔で迎えてくれた。
「お久し振り。久しぶり。元氣？」

が速く、好奇心旺盛で、一緒に居ていつも楽しい相手だ。
トリコさんは昔、同じ雑誌に書いていた頃からの知り合いだ。放浪の詩人で、頭の回転

お言葉に甘えて、久しぶりの旅行に出かけることにした。
なんとかなるよ。近くに温泉もあるよ」

泊まりがけで遊びに来なよ。スタッフ用の部屋があるからさ、今からでも泊まるどころは

「そこらへんはもう終わつてるから。それよりさ、せっかくの連休だし、お客さんとして

返事を出すと、すぐに返信が届いた。
「英語の元シナリオがあれば、字幕つけボランティアぐらいなら、できないこともないで

トリコさんが帰国して、東北の映画祭にスタッフ参加している、とメールが来た。



『強行突破』 鳴原あきら

20190825

<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~Narisama/>

toriko2.html

[twitter @narisama_cmbot](https://twitter.com/narisama_cmbot)

